

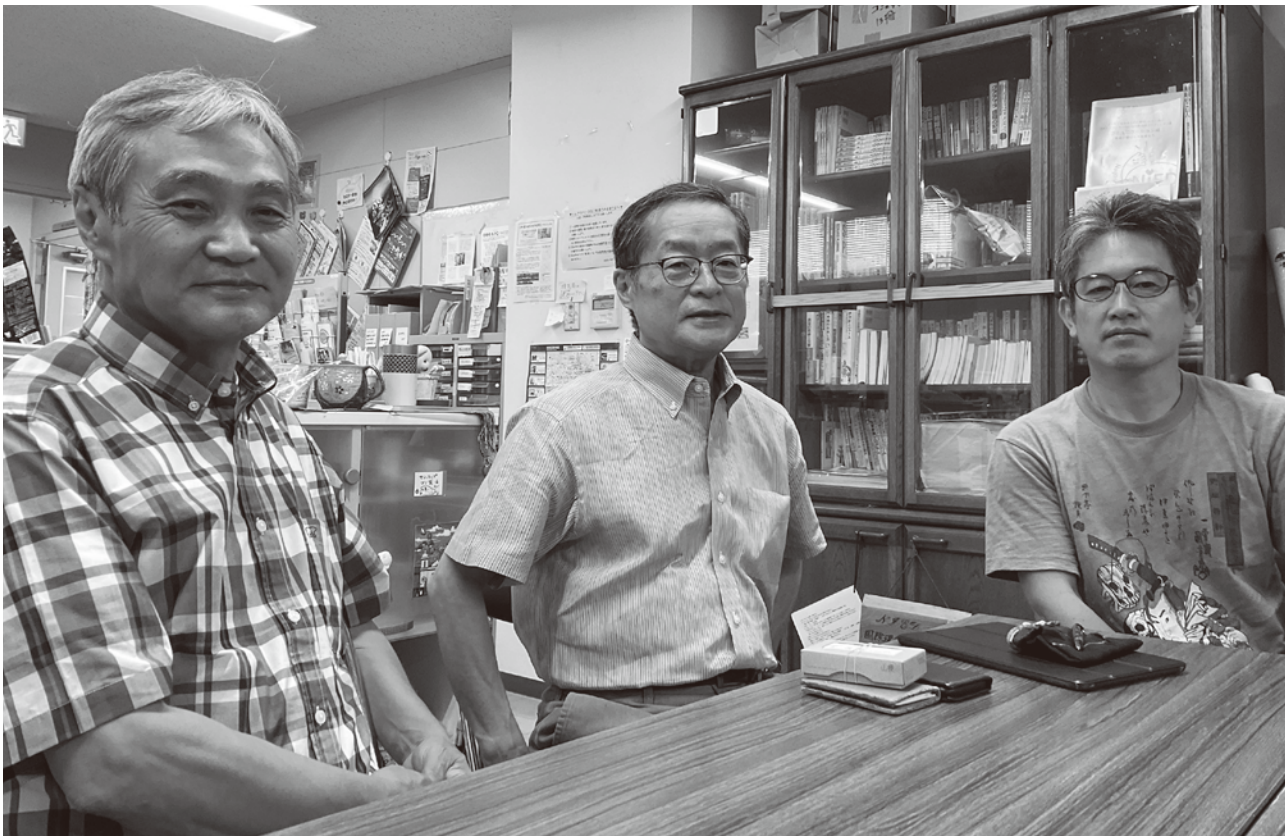


さんぐりあ

名古屋NGOセンターの主な活動

- ① 地域及び全国的NGOのネットワーク作り
- ② NGOスタッフやボランティアのためのセミナー実施
- ③ 一般市民へのNGO情報の発信
- ④ 地球市民教育のためのセミナー、フォーラム等の実施
- ⑤ 自治体、及び関係機関への提言・協力活動

さんぐりあとは、赤ワインにいろいろな果実を漬け込んでつくる飲み物です。
これを世界にたとえ、さまざまな果実(人々)の個性を損なわず、素晴らしいハーモニーが奏でられるようにと願いを込めて、名付けられました。



(左)八木 巖さん:前代表理事、(中) 中島 隆宏さん:代表理事、(右)坂 茂樹さん:代表理事 名古屋NGOセンター事務所にて

特集

35周年に寄せて 名古屋NGOセンターの今までとこれから

東海地域に点在するNGOをつなぐ立場としての名古屋NGOセンターが発足して、35年となる。それぞれは小さな存在である地域のNGOが連携することで、それぞれの活動を活性化させ、助け合っていける。NGO活動の核になる理念を学びながら、市民活動に共通するノウハウを体験学習する場としての「Nたま」もNGOの活性化に貢献してきた。コロナ禍という未曾有の危機を経験した今、名古屋NGOセンターはどこを目指していくのか。特集では、名古屋NGOセンターの今までをよく知る二人と、新たに共同代表に就いた理事との鼎談から、NGOの置かれた現状と今後の課題を語ってもらった。

35周年に寄せて 名古屋 NGO センターの今までとこれから

この35年間に日本をとりまく環境は大きく変化した。名古屋 NGO センターの前身・なごや第三世界交流センターが発足した1988年はバブル経済の真っ最中だったが、それ以降の日本は「失われた30年」などともいわれ、経済的には現在に至るまで停滞が続いている。ODAのあり方も変化している。その環境の中で海外や国内での役割も変わってきている。今後、名古屋 NGO センターはどこを目指すのか？

★座談会参加者のプロフィール

八木 巖（やぎいわお）さん

不戦へのネットワークの理事を務める。
1995年の沖縄での米兵による
少女暴行事件を契機に活動スタート。

中島 隆宏（なかしまたかひろ）さん

1988年からアジア保健研修所（AHI）の
職員として在職し、現在はフェローとなる。
NGO・JICA 協議会を担当。

坂 茂樹（ばんしげき）さん

キャンヘルプタイランドの副理事長を
務める。1996年からタイ・カンボジアの
子どもたちへの就学支援などをしてきた。

名古屋 NGO センターができた経緯

司会：名古屋 NGO センターができたきっかけは？

八木：民衆連携をめざして、なごや第三世界交流センターが1988年にできた。

中島：それ以前 AHI は、関西 NGO 協議会に参加していた。その後、名古屋にもネットワーク NGO を作ろうということになった。

司会：その頃は日本の援助のあり方に様々な批判がありましたよね？

中島：1980-90年代には、JICA と NGO の対立構図があった。2000年頃に外務省・JICA と NGO の連携体制ができていった。NGO と外務省が定期的に課題を話し合う場、ODA 政策協議会（下図①）では、外務省への政策提言をやっている。

外務省・JICA と NGO の関係変化

八木：それと並行して「連携推進委員会」（下図②）がある。

中島：これは NGO と外務省が連携して、国際協力の質を向上させようという会議。ここで外務省からの補助金も出ている。「Nたま」も、もっていた。

八木：その補助金が結構大きな額でした。

司会：1990年頃は ODA 政策への批判があった。

八木：日本の ODA が現地の人に役立つのかとか。

中島：今は、そういったことを ODA 政策協議会で、話し合っている。

司会：キャンヘルプタイランドも補助金をもらった？

坂：昔は郵政省のボランティア貯金から1000万円ぐらい補助金をもらったこともあったが外務省とは関係がなかった。

【外務省・JICA と NGO の対話と協力】

外務省 ———— NGO・外務省定期協議会

全体会議

ODA 政策協議会 ①

連携推進委員会 ②

JICA = ODA の
実施機関

NGO・JICA 協議会 ④

- ① 名古屋 NGO センターが事務局を務めている
- ② 補助金など NGO 支援のスキームを話し合う
- ③ 名古屋 NGO センター、関西 NGO 協議会など
- ④ JICA と NGO の連携を通じ国際協力に取り組む

NGO 連携団体

JANIC

比較的大きな NGO
例：シャプラニール、
シャンティ、国境なき医師団など

その他の
ネットワーク NGO ③

地域に根ざした
中小規模の NGO

来し方行く末



NGO と政府との協力体制を語る理事

八木：NGOの役割として、ODAが現地の人に役だっているかを監視する。環境破壊をしていないかとか、ミャンマーの軍事企業にODAが使われていないかとか。それもNGOの大きな役割だ。外務省はNGOもパートナーとしてきたが、最近は変化している。中国が自国に有利な援助を海外にやっていることもあり、重点が国益という考え方になっている。

司会：特に安倍政権以降、すごく変わってきている。政策協議の機能低下があるのでは？NGOを無視したり。

八木：NGOの力が低下して足元を見られている。

司会：名古屋NGOセンターとしては、小さいNGOに補助金の紹介をしてるんですか？

中島：JICAの場合には、補助金でなく委託形式です。NGOのやりたいことをJICAの主催で実施する。各地域にJICAの支部があり、企画の段階などで細やかなサポートがある。外務省の場合は補助金になるが、大きな予算を出す背景には、国際的に通用するような大きなNGOを作ろうという方針があって、小さいNGOを育てることには関心がないように思える。



JICA 中部

「多文化共生」の位置づけ

司会：三年前からJICA中部と協力して、多文化共生プログラムをやってますね？

坂：コロナ禍をきっかけにJICAが多文化共生事業などの国内活動にも取り組むようになった。

中島：多文化共生や外国人材への取組をJICAが始めたのは2020年度からです。国際協力事業団法があるのに、なぜJICAが多文化共生という国内問題に取り組むようになったか？JICA関係者の話では、外務省ではなく、内閣府からの指示があったそうです。「国際協力だけでなく、外国人材、多文化共生という国内の課題にも取組め」とも受け取れます。

司会：本来、海外協力をするJICAが国内問題に取り組み始めたのには政治的背景があったということですかね？

中島：国際協力よりも国内問題が大事という世論の高まりも、その背景にあると思う。

八木：名古屋NGOセンターは政策提言委員会の中から、NANCIS（市民社会スペースNGOアクション）にも代表を送っている。（※八木さんが共同代表）そこでは言論の自由とか、市民が声をだせるように活動している。

日本のNGOを取り巻く環境の変化

中島：名古屋NGOセンターには国際協力のNGOだけでなく多文化共生のNGOも参加している。大規模なネットワークNGOなどにはない当センターのこの特性を生かして、国内も国際も取り込んでいく方向性が高い。

司会：中部地方は製造業の中心で、外国人労働者が多いですからね。

坂：タイへの支援の際に地元のタイ人グループに手紙書きを頼んだりしている。

司会：最近アジア諸国の経済成長が著しいです。

八木：購買力平価でも日本はかなり衰退している。

坂：昔は日本で資金を集めて現地で支援すれば、何倍もの支援ができた。今はもう格差がなくなってきている。そこで現在は日本の大学生にタイで研修してもらつツアーをやっている。

中島：さっきのJICA中部との共催による多文化共生パートナー育成講座では保見団地で多文化体験をもらう。日本の若者から無意識の差別・偏見をなくしてもらいたい。

司会：若い人たちは環境問題に敏感だし、SDGsも学校で勉強してるから期待しましょう！

座談会を終えて

1980-90年代には、日本のODAの問題点が様々に議論された。その結果、海外援助をめぐる体制に一定の改善が見られ、外務省・JICA・NGOの間の協力体制が構築されていった。しかし、現在は日本の経済力の低下を背景に、予算は縮小し、日本の国益のためのODAをめざす方向へと回帰している。また、中国の「一帯一路」政策や、ウクライナ戦争を契機にODAとは別のOSAという軍事支援可能な枠組みが動いている。このような傾向をNGO側が監視するためにも、NGOは政府の補助金に頼らず、自前の財政健全化をめざす必要がある。そのためには市民への働きかけを、いよいよ強化しなくてはならないと感じた。

(担当：中島正人、内藤裕子)

35年間の道のり

1988年	名古屋市内で活動する12の市民団体の緩やかな連合体として、名古屋NGOセンターの前身「なごや第三世界交流センター」が設立される。ボランティア中心に情報の共有やイベント開催への協力活動を行う。
1993年	「アジア市民フォーラム愛知」を開催。
1994年	「第3回全国NGOのつどい」を開催。幅広く市民に対して開かれた窓口となる必要性が求められるようになる。
1995年	13団体の加盟のもと、正式に「名古屋NGOセンター」発足。事務所を東区「勝和荘」に置く。会報「さんぐりあ」を発行（継続中）。
1996年	事務所を北区東長田町に移転。
1997年	「NGO海外スタディツアー」を開催（2005年度まで）。
1999年	事務所を中村区「NPOプラザなごや」に移転。外務省「NGO活動環境整備支援事業」の一環として「NGO相談員」を受託（継続中）。
2000年	特定非営利活動法人格取得。
2002年	「国際理解教育セミナーinなごや」を開催（2014年度まで）。名古屋NGOセンターの理念・目的を明文化する作業を行い、名古屋NGOセンター憲章（愛称「ステファニ憲章」）と命名。「NGOスタッフになりたい人のためのコミュニティ・カレッジ（通称「Nたま」）」を開始（継続中）。
2003年	ステファニ・レナト初代理事長が東ティモールで自動車事故により逝去。
2004年	「なごやボランティア・NPOセンター」の管理運営を特定非営利活動法人ボランタリーネイバーズと特定非営利活動法人ボラみみより情報局の2団体と共に開始（2007年度まで）。
2006年	事務所を中村区のCOMBi本陣（旧本陣小学校）に移転。JICA中部との協働事業「国際協力カレッジ」を開始（継続中）。
2008年	「横のつながりを作る勉強会」を開始（2021年度以降休止）。「東海地域NGO活動助成金」を開始（継続中）。
2009年	NGO-JICA協議会を名古屋で開催（継続中）。
2010年	第10回生物多様性条約締約国会議COP10に関連して、ワークショップやシンポジウムを開催。
2011年	東日本大震災の被災者支援のため、現地で活動する中部地域のNGOを支援。
2012年	事務所を中区栄「YWCAビル」に移転。
2015年	認定特定非営利活動法人を取得（2019年度まで）。
2016年	伊勢志摩G7サミットに合わせて「市民の伊勢志摩サミット」開催。
2018年	組織基盤強化のため活動を、「NGOの組織強化」「人材（人財）育成」「政策提言」の3つに集中することとした。
2019年	G20外相会合において市民社会スペースの保護と拡大を提言。
2022年	Nたまサポーター募集のファンドレイジングで100人を達成。



1999年度いっしょにやるまいNGO
中部NGOフォーラム（ハンガーバンク）



2002年度Nたま1期生のインド海外研修



2007年度さんぐりあ座談会
（COMBi本陣事務所）



2010年度生物多様性条約
第10回締約国会議（COP10）ワークショップ

（担当：丹羽）

35年の永きにわたり続けてこられたことに、心からの敬意を表します。

創立時の名称「なごや第三世界交流センター」にある「第三世界」という言葉が、「第一世界」、「第二世界」と共に使われなくなってから久しく時が過ぎました。世界情勢の変遷を思います。

名古屋学生青年センターも長年にわたりアジア諸国との関わりを持ち、いくつかの活動を実施して来ました。その中の一つに「国際子ども学校」があります。名古屋市内やその近郊で生まれ育ちながらも、保護者に在留資格がないためどこにも登録されず、就学できずにいたフィリピン人の子ども達の学校です。創立は1998年、最年長の子どもは就学できないまま15歳になっていました。

この学校が、2004年に第一回目の「ステファニ・レナト賞」を受賞しました。前年に天国に旅立ったステファニさんの遺志を引き継ごうと創設された賞です。受賞の知らせを受けた時は、嬉しさよりもステファニさんに対する懐かしさと、悲しさで胸がいっぱいになったことを鮮明に覚えています。ステ

エッセイ
NGOの散歩道
第38回

創立35周年に寄せて

ファニさんの横顔が彫られた盾は、受賞時からずっと名古屋学生青年センターの受付窓口に飾られています。

国際子ども学校の設立から25年が経ちました。卒業生の中には地域に根差した日常を送っている者がたくさんいます。一方で、いまだ社会福祉を享受できない子ども達、就学の機会を得られない子ども達が存在するのも事実です。緊急避難的に設立した「国際子ども学校」ですが、25年経った今もそのニーズは変わることなくあります。このような状況を未だに許していることに、私はとても恥じ入っています。

名古屋NGOセンターや加盟団体は、それぞれ違う役割と場を持っています。しかし、弱くされた人たちのいのちとその尊厳を守るという目的は一つです。コミュニティーを同じくする者が活動の場や内容は違っても、同じ目的を持って歩み続けること、これに勝るものはないと確信します。

名古屋学生青年センター 池住 圭

さんぐりあ編集委員がおすすするモノ・ヒト・メディア情報

NANGOC RECOMMENDS
なんごりこめんず vol.76

このコーナーでは皆様からの「りこめんず」を募集しています。NGOに関するあらゆる「おすすするもの」情報をおよせください。e-mail:info@nangoc.org ※「NANGOC」とはNAGoya NGO Centerの略です。



学ぶことは変わることを
自分と地域の力を引き出すアイデアブック

(著)デビット・ワナー/ビル・パウワ
(翻訳)公益財団法人アジア保健研修所(AHI)/

一般社団法人Bridges in Public Health(BIPH)

桜井裕子の
オススメ



3,980円 銀河書籍 / (電子版 2,980円) 2023年

詳しくはこちらから



アジア保健研修所(AHI)
Mail:info@ahi-japan.jp

本書は、メキシコ西部の村の住民たち自身による健康な村づくりを支援した、作者の経験に基づいて書かれたものだ。初版から40年を経ているが、AHIやBiPHにより翻訳・出版され、今なお地域活動や社会教育の場で幅広く活用できるヒントがたくさん詰まったアイデア本だ。なにより、本来「学ぶこと」とは何かを考えさせてくれる。

特に感じるのは、いかにその地域の生活を知るかが鍵であること。病気を伝統的な方法で治療する地域もある。その全てを否定はせず、まずは受け入れる。実はそこにヒントがあるからだ。目線を合わせ、そこから転換して有益な方法を導き出す。私たちにとって当たり前が、当たり前でない現実、健康被害や自然災害に突如見舞われる昨今だからこそ、読んで、知ることだけでも価値がある。多くの人によって手掛けられた全640頁の大作だ。



顔のみえる店
~FAIR TRADE風"s(ふ〜ず)

渡辺祐樹の
オススメ

東片端の正文館書店から 2023年7月に名古屋市北区に移転オープンしました。昔ながらの下町に夢ある若者が集う街。ツタに覆われたなんとも趣のあるビルの3Fの奥まったところにある「ひみつのスペース」にて店長のむしか六鹿さんが出迎えてくれます。私たちの暮らしに寄り添って、買い物を通じて心が豊かになる。そんな手仕事とフェアトレードの商品を愛情たっぷり説明してくれます。

中でも私がおすすしたいのが、毎月第2木曜日に入荷されるフェアトレードバナナ。その時期折々の色や味や形を楽しむことができます。当初フェアトレードは敷居が高いと感じていた私にとって気軽にお店に通うきっかけを作ってくれました。今でも店長とお話やお店に集う方々との偶然の出会いを楽しみに通っています。



六鹿店長(右)と元NたまインターンのL00-Na(ロオーナ)の村田さん(左)

〒462-0844 名古屋市北区清水5丁目10-8
グリーンフェロービル3階3C
月・木・金・土曜日=12時~17時営業
(火・水・日曜日=マルシェ出店 or 休み)
※臨時にお休みすることもありますので、インスタを確認または電話いただけるとよいです。電話は営業時間内のみ確認できます。

Instagram : @huzu.fairtrade
TEL : 070-9120-8820

Nたまのいま

No.48



いしかわ ひろひと
Nたま1期生 石川 博仁さん

名古屋NGOセンターが主催する、将来のNGOスタッフを育成する“次世代のNGOを育てるコミュニティカレッジ”（通称Nたま）。2002～2022年度までの19回で（2004年、2020年度はお休み）、研修を受けた方は274名。のべ151名の修了生がNGO・NPOスタッフの担い手として羽ばたきました。

約半年間の研修を終えた卒業生たちは、今ここで、どんな活動をしているのでしょうか？

2023年度で、Nたまは20期を迎えました。今号では、最初のNたま生（1期生）で、今も名古屋NGOセンターのホームページ更新ボランティアに関わっている石川博仁さんにお話を伺いました。

Nたまを経て自分の生き方を探し当てる

■Nたまに参加したきっかけは？

瀬戸で1993年に開催された「アジア市民フォーラム」で名古屋NGOセンターの前身である、なごや第三世界交流センターのメンバーの方々にボランティアで関わらないかと誘われたのがきっかけだったと思います。そこでいきなり、ネパールの女性の自立を考える分科会の担当を任せられました。自分の人生で初めて、女性の自立という問題に目を向けたきっかけでもありました。

しばらく年月を経て、名古屋NGOセンター主催で「NGOスタッフを育てる研修」がはじめて開催されるということで参加してみようと思いました。それまでなかった、「(NGOの)スタッフを養成する」試みに心惹かれたことを覚えています。

■Nたまで印象に残っていることを教えてください。

インドでの海外研修が一番印象に残っています。その当時の日本では、今ほど気候変動について騒がれている時ではありませんでしたが、インドの現地NGOスタッフにはその問題にすでに大きな危機感がありました。また、海外研修に行ってみてソムニード（現：ムラのミライ）をはじめとする現地スタッフの方と会話する中で、その当

時の活動は日本から途上国へ支援しているという感じが強く、被支援者主体の活動ではないと感じました。

全体を通じては、お金よりも、生きていくために必要なことは何なのかを考える最初のきっかけになり、自分の生き方や考え方が持てると同時に視野が広がりました。

■Nたまを終えた後はNGO/NPOで活動されたのでしょうか？

スタッフを養成するということに惹かれ研修に参加しましたが、いきなり海外の現地スタッフになるということやNGOに飛び込んでということではできず、勇気が足りなかったと思っています。その当時、NGO/NPOを仕事として生活していけるのか？就職できるのか？という迷いがありました。すぐにはNGO/NPOに就職しませんでした。数年後にチェルノブイリ救援・中部の会計スタッフとして活動に関わった時期がありますね。

一方で、Nたまが人生の方向性を変えるきっかけになったことは事実です。受講当時は、「自分の生き方」が定まっていなかった時期でした。今思うと、自分の生き方や軸を決める、考えるというプロセスにNたまは必要だったのだと思います。

■現在の活動や思いを教えてください。

愛知県内で、介護・福祉の仕事をするとともに、田んぼでの米作りに取り組んでいます。若い世代が農業に魅力を感じなくなり、輸入農産物があふれ国内の農業を含めた第一次産業はどんどん衰退してきています。しかし、海外に目を向けてみると食料生産を含む第一次産業は最重要であることがわかります。そこに目を向け、携わっていくことに強い関心を抱くと同時に、この国ではそれを大事にできなくなっている世の中であることに気づかされました。



種籾から苗を育てる

(担当：廣井)

センターの動き

名古屋NGOセンター35周年記念イベント

1988年の「なごや第三世界交流センター」の設立から35周年を迎えるのを記念して9月3日にイベントを開催しました。センターの歴史を振り返る第一部では初代理事長のステファニさんをはじめ、反差別や反戦争などにそれぞれ取り組んでいる人たちが繋がる場として始まった頃から、それぞれの時代を背景に政策提言や開発教育、人材・活動育成などに取り組んできた35年を振り返りました。第二部ではグループに分かれ、第一部の登壇者と参加者が混ざって、名古屋NGOセンターに期待することをテーマとして、センターの今後について話し合いました。社会の問題についてじっくり議論できる場や一面的な情報だけでなく多面的な情報発信、NGOらしさの承継などが語られました。

イベントの中でセンター誕生の時代は円高によって市民が海外に行きやすくなり、その国の状況を直に見たことがNGOの活性化に繋がったという話がありました。

社会や地域、自身の暮らしと繋がる問題を変えていくために、現場の声を集め、多くの人たちと語り合う場をつくり、学び合い、一緒に行動していくことが、名古屋NGOセンターの役割の一つだと体感する日となりました。



イベント終了後のゲストと参加者

(報告:理事 笠原)

新理事紹介

2023年5月の総会で役員が改選され、西田文乃、市野将行、竹内ゆみ子、龍田成人の4人の理事が退任し、新しく以下の4人が理事に加わりました。また、共同代表が八木蔵、中島隆宏から坂茂樹、中島隆宏(継続)に代わりました。

うらみ としこ 裏見 登志子さん

バングラデシュで物乞いをする子ども達、様々な形で働く子どもたちを目の当たりにし、自分に何ができるのか考えるようになりました。Nたまに参加したのもその頃です。貧困、戦争、災害などの最も大きな犠牲者は子ども達です。子ども達が自由に遊び、学び、将来に夢を持てるような社会実現に向けて活動できればと思っています。



かさはら そうたろう 笠原 聡太郎さん

2010年度のインターンシップが名古屋NGOセンターとの出会いです。その後センターと関わる人々から、社会の仕組みと自分の暮らしの関係性や平和と人権の尊重された社会づくりのための取り組みを学ばせてもらいました。これからは理事としても皆さんと一緒に悩み、考え、行動していきたいと思っています。



ひろい しゅうへい 廣井 修平さん

2010年(その当時は中学3年生)から、名古屋NGOセンターに関わり、はや13年が経ちました。社会を、周りを「ほんの少しでも良い方向に」と思って活動に関わってきました。今期からは、理事として少しでも貢献できればと思います。



ふじもと きよし 藤本 潔さん

名古屋NGOセンターにはこれまでお世話になるばかりでしたが、この度理事として、微力ながらお手伝いさせていただくことになりました。南遊の会は20年以上に渡ってベトナムでのマングローブ植林活動を続けてきましたが、その経験を少しでも地域や社会に還元できるよう努めていきます。



活動報告カレンダー 2023年3月1日～2023年8月31日

●コンサルティング

・NGO相談(外務省NGO相談員):3~8月 399件、出張相談(4/29@連合メーデー、5/13@東京・垂井、7/30@森の音楽祭、8/9@アイキャン)、連絡会議(6/13)
・講師派遣:READYFORウェビナー(3/8)

●人材・活動育成

・NGOスタッフになりたい人のためのコミュニティ・カレッジ2023(なごや) 説明会(6/22,25,28,7/1) 入学式(7/29)、講座(8/6,26,27)
・インターン説明会(5/24,8/23)

●政策提言

・中部NGO・JICA中部地域協議会開催(3/2)
・NGO・JICA協議会参加(3/14)
・多文化共生パートナー育成講座実施(3/19)
・ODA政策協議会参加(3/20、7/28)
・開発協力大綱の改定に関する意見交換会参加(3/20)

●運営

・総会(5/20)
・理事会(4/18,5/20,7/11)

●情報収集・発信

・会報『さんぐりあ』5月号発行(4/18、1,000部)

情報発信	3月~8月
ホームページ	センターからのお知らせ更新回数 19 中部NGO情報ひろば更新回数 20
facebook(フォロワー数1,382人)	更新回数 70
メルマガ(登録数258人)	配信回数 31

●賛助会員(個人)

【更新(賛助会員A)】

高木雅成、二角智美、藤井朋子、神田すみれ、大川元嗣、近藤公彦、市川隆之、今井田正一、齋田容子、山田隆円、谷口千賀子、鉄井宣人、松本恭一、西井和裕、加藤克也、篠田英次、株根秀之、加藤明宏、水野洋計、高田信英、平野木恵、福田美津枝、遠山涼子、蟹江舟美、川島紀之、加茂省三、佐竹眞明、丹羽輝明、矢内淳、谷川毅、中島正人、横山紀子、清水淳、林滋、鷺見三恵子、堀田妙子、山本卓也、水谷洋子、廣井修平、平尾秀夫、斉藤尚文、加賀美薫、高野菜、三田禮子、岡田雅宏、山崎眞由美、中島正、竹内智子、佐原恵津子、中垣貴裕

【更新(賛助会員B)】

中島隆宏、山口大輔、裏見登志子、松田則雄、吉田英一、藤井典夫、松尾朋之、久野博司、伊佐次歩、田中幸男、吉川典子、山岡要子、佐藤都喜子

【新規会員】

市川雄太、岩野玲奈、南創太、松田翼、加藤菊乃、久保田蒼、青木そら、小田孝

●寄付者(物品なども含みます)

【一般寄付など】

二角智美、三田禮子、四ノ宮昌宏、春日あかね、西サハラ講演会懇親会

【東海ろうきんNPO寄付システム】

伊藤武士、宇野菊夫、大島京子、加藤勝子、大野博人、後藤文昭、酒井俊輝、水野愛、目加田貴弘、山田志帆、松下和哉、土肥和則、中島正人

【Nたまサポーター】

・協賛企業

岡谷鋼機株式会社、連合愛知

・寄付サポーター

市川隆之、今井田正一、林滋、三田禮子

・マンスリー / 年間サポーター

加藤里紗、松浦史典、春田みな美、原田篤実、八木巖、栗田佳典、村上沙智代、大須賀恵子、中島正人、木村容子、松本恭一、尾崎寿光、谷川毅、斉藤尚文、坂部武志、近藤公彦、中尾さゆり、藤井朋子、斉藤順子、桃井義博、遠山涼子、山本梨恵、神田すみれ、裏見登志子、龍田成人、鉄井宣人、加藤里紗、高木雅成、二角智美、吉岡嗣晃、吉川典子、松浦良子、中島隆宏、笠原聡太郎、河合良太、天野友貴、平林義康、北村祐人、株根秀之、磯村さやか、小池康弘、中島正人、和田さとみ、東憲吾、筒井広治、細井和世、佐藤元紀、貝谷京子、小森(久田)夏未、高野菜、大川元嗣、榎原浩之、瀨川義人、丹羽俊策、横井春香、森元裕恵、中垣貴裕、水谷洋子、渡辺祐樹、岩瀬孝弘、柴田さくら、武藤由師、チェルノブイリ救援・中部、吉田拓生、田中由衣、竹内由美子、高橋美和子、佐藤光、黒田朱里、石川博仁、伊沢令子、青木研輔、熊澤友紀子、関口威人、神谷周作、池住義憲、工藤泰三、落合佑哉、田中典子、三ツ松由有子、藤本潔、古橋佑典、窪川佐紀、和田信明、岸本正好、村田元夫、寺田裕美、鈴木二葉、松中みどり、和喜田恵介、青山岳史、浅野愛美、柴田英知、久世治晴、川島知司、川合眞二、福嶋聡子、櫻井裕子、中島正博、後藤優里、大屋正人、前倉英人、尾関智枝、河田昌東

●アフィリエイト

楽天215ポイント

●協力者

【4/28発送作業ボランティア】

いわちゃん、内藤、マサ、いっちゃん、八木、キミー

事務局のひとこと

元スタッフのほーりーのお店「雑貨店ルティカ」(豊橋)によく訪問することができました。居心地がよくなって、ついつい長居してしまいました。AHI、ニカラグアの会、ホープの商品も置いてあります。豊橋に立ち寄った際はぜひ。(田口)

編集後記

35周年祭ということで、私自身の35周年を探してみた。長く続けている趣味や交友関係など、せいぜい20年だ。では35歳のときは?あ、確か新聞広告を見て、初めてNGO主催のイベントに参加した年だ。こんな働き方があるのだと感銘を受けた。その後、私はボランティアとして関り、今まで知り得なかったたくさんのことが広がった。感謝。(桜井)

初めてさんぐりあのデザインを担当したのが、2009年2月発行の82号。その間名古屋から神奈川へと引っ越し、数えてみると、今号まで計46冊に関わったことになります。あつという間の14年間でしたが、今号をもちまして卒業させていただくことになりました(涙)偶然にも35周年!みなさま、本当にありがとうございました。(久)

写真展

日本ASEAN友好協力50周年記念

— 10の国と地域が描く未来 —

ASEAN

2023.9.21
→2024.2.25

写真:中島 亮潤

開同
催時

基本展

SDGs=未来につながる17の約束

アクセス|名古屋駅から徒歩13分 名駅・ささしま
開館|10:00-18:00 休館日|月曜・年末年始
(祝日の場合は開館、翌平日が休館)



本場インド、チャイワラの
淹れる”あの味”!

南アジアの香りに満たされる

Nたまインターンの
ヨクさんがイチ押し発信中!

第3世界ショップの「チャイバック」

風'Sは移転しました ★最新情報はSNSにて!



顔のみえる店~FAIR TR 風'S (ふ〜ず)



〒462-0844 名古屋市北区清水5丁目10-8
グリーンフェロービル 3C(EV有)
営業日/月・木・金・土12時~17時
Tel/ 070-9120-8820 (FAXはありません)



発行:特定非営利活動法人 名古屋NGOセンター
会報編集委員:市川隆之、中島正人、廣井修平、桜井裕子、
内藤裕子、丹羽輝明、渡辺祐樹、村山佳江
レイアウト:久由紀枝、桜井裕子、渡辺祐樹
発行日:2023年10月17日
印刷:山本印刷有限会社

特定非営利活動法人 名古屋NGOセンター

〒460-0004 名古屋市中区新栄町2丁目3番地 YWCAビル7F
TEL&FAX:052-228-8109 URL:http://www.nangoc.org
E-Mail(代表):info@nangoc.org

会報『さんぐりあ』のレイアウトをボランティアで担当してくださる方を募集しています。
ご自宅でイラストレーターの作業ができる方がいらっしゃいましたら、名古屋NGOセンター事務局までご連絡下さい。